九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

存在命題と個體的表現

習田，達夫

https://doi.org/10.15017/2328800

出版情報：哲學年報. 18, pp.180-198, 1955-11-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

存在命題と個體的表現

習田達夫

一　存在命題は動的命題である

〔表現と存在。〕

表現とは、常に何物かの表現であると同時に、表現である限り、それは必然的に私の〃内〃に受け取られて居るものでなければ、それが表現であることの意義を保持することは出來ないのである。それ故に表現とは、私にとつての表現であつて、私がそれを直接に意識するが故にそれが表現として成立するのであると云はなければならないであらう。即ちこの意味からして、表現とは實はそのまゝ内的なるものとして、直接に直觀的なるものであると云はなければならないのである。然し表現が直觀的であると云つても、その直觀は例へばカントの場合の如く、何か感性の如きものによつて媒介せられて居ると考へてはならない。我々は直觀に就いて、その客觀性の根據、又は形式の如きものを〃表現〃の外に求めることは出來ないのである。直觀的であると云ふことは、たゞ我々にとつて直接的な表現であると云ふことを意味するだけである。直接的な表現と云ふものは、例へば身體的乃至は精神的とでも云ふべき何等かの條件によつて、制限せられて居るものと云はなければならないであらう。然しかゝる制限に就いて、その客觀的根據

を求めることは、最早や意味がないのである。我々はたゞ直觀的な表現を持つのであり、而もこの直觀的な表現を、たゞ制限的な表現として受け取つて居ると云ふ外はないのである。しかも受取つて居るとは云つても、それを受取るべき何者かを考へるのではないから、この直觀的表現がそのまゝ直ちに內的なるものでなければならない。從つて直觀が制限的であると云ふことは、それが何か外的なるものによると考へる外はないであろう。それ故に又直觀的表現は絕えずこの外的なるものによる制限を排除し、越えると云ふものでなければ〃內的なるもの〃としての表現と云ふことの本來的意義は滿される筈のものではないと云ふべきではなかろうか。問題はこゝから出發する。

即ち、表現は先づ以上の意味に於て直觀的であるけれども、然しすべて直觀的なるものは、直ちに表現であると云ふことにはならない。直觀的なるものが表現として考へられる場合には、その直觀は何ものかの表現であるとして反省せられ得ると云ふ論理的構造を持つところのものでなければならないのである。換言すれば、直觀はかくの如き論理的構造を持つに及んで、はじめて〃表現〃であると云ふことが出來るのである。從つて表現の論理的構造は、文法的な言葉を借りて述べるならば、主語的な契機と述語的な契機とから成立して居ると見るべきであつて、表現とはこの主語的なるものを表現の根據として、その述語的置位に於て成立するものと考へることが出來るであらう。然しこゝで注意すべきことは、この主語的契機に於て考へられるところのものを表現の根據であると考へることは、實はこの表現の根據であるところのものを、表現そのものの〃外〃に考へることにほかならないと云ふことである。

そこで先づこのやうにして表現の外に考へられたる（表現の）〃根據〃は、既に論理的構造に於て主語的契機として把捉せられるものであるが故に、それは述語的契機に於て捉えられるところの表現の如く內的直觀的であることは

出來ない。むしろこのやうにして純粋に論理的に把捉せられたる契機として指示し得られるところのものであり、從つて文法的には先づ〃これ〃と云ふ如き指示代名詞によつて指示し得るところのものに相當すると云ふことが出來るであろう。然しながら又一方に於て、それは何處までも直觀的表現の〃根據〃として考へられるところのものであるが故に、たゞ單なる文法的述語に對する主語的契機としてのみ想定することはむしろ危險である。根據はどこまでも直觀的表現の根據として具體的でなければならない。否、根據なるものが具體的なるものであるからこそ、その表現として我々は制限的であるとは雖え、少なくとも直觀的な表現を持ち得て居るのであると云ふべきではなからうか。我々は、いまこのやうにして、具體的なるものとして、論理的に指示し得るところの表現の根據を〃存在〃と稱することが出來ると思ふのであるが、然しこのことは、既述の如くどこまでも存在をたゞ反省的に〃外なるもの〃として、即ち單に論理的な契機としてのみ捉えたところのものに過ぎないのであるから、それ自身述語的置位に於ける表現（述語的表現）であることは出來ないが故に、こゝで誤解してはならないことは、それを〃存在〃であると云つても未だ決して〃內なるもの〃として捉えて居るのではないと云ふことである。

かくて表現すると云ふことは、その根據を求めると云ふ論理的構造の故に、先づ存在を外的なるものとして規定することによつて既に述べた如く必然的に制限の內に陷るのである。しかもまさにこの論理的構造の內からの原理の爲めに再びこの制限を〃越える〃と云ふことによつて存在を〃內的なるもの〃として表現し來たるところのものでなければならないのである。このやうにして存在の表現は、その論理的構造の故に〃動〃的表現でなければならないと共に、その論理的構造自身も亦こゝに〃動〃的なるものとして解明することが出來るのである。

例へば存在の表現を〃これは花である〃と云ふ如き命題的構造に即して考へて見るに、〃これ〃と云ふ主語的契機

の置位に考へられた存在が、一應連辭〝ある〟によつて述語的表現にまで綜合せられると考へることも出來るであらう。しかし既に述べた如く、表現はどこまでも存在の表現であるから、命題に於ける連辭の役目の如きは、たゞ主語的契機の置位に考へられた存在を、述語にまで綜合すると云ふことを表明する爲めに、單に命題の形式にのみ必要な記號に過ぎないのであつて、この場合、述語的表現にあたるものは、どこまでも〝この花〟の直觀的表現でなければならないのである。しかもその場合〝これ〟と云ふ存在の表現は、單に〝この花〟と云ふ言葉でのみ現はし得て居るところの直觀的表現の內に止まることは出來ない。むしろ更に具體的なる表現を求めて、例えば枝、莖等からの區別に於て、又は花瓶に生けられて居るとか、我が家の座敷に置かれて居るとか、更にはその周圍の雰圍氣とか次々にと直觀的表現が重ねられることに於て、以前の制限的な表現をはるかに越えて、益々具體的に表現せられて來るのである。

從つてそこに於ては〝存在〟とは上述の如く單に論理上の主語的契機として〝これ〟と云ふ如き靜的な指示代名詞によつて記號付け終せるものではなく、むしろ述語面に於て考えられるところの直觀的表現が、常に越えられると云ふ動的構造を持つところの〝存在命題〟の主語的契機に於て考へられるところのものと云ふべきであらう。それ故に表現の論理的構造に就て云ふならば、それは最早や單なる主語の述語的表現と云ふことに止まり得るものではなくして、むしろ以上のやうにしてその述語面に於て、直觀的表現とそれを越えると云ふ運動との綜合であるところの〝動的表現〟を持つものであると考へなければならないのである。それ故に、その論理的構造を命題的に表現するならばそれは動的命題とでも云ふべきものであらう。從つてこのやうな、存在命題に於けるその主語的契機として考へられるところの存在は、單なる論理的契機として想定し得る如きものではなくして、却つて以上の如き存在命題の動

的表現の根據として、たゞこの動的表現のみが規定し得るところの具體的なるものと云はなければならないであらう。

かくて存在命題の動的表現は、直觀的表現に於て更に直觀的表現を重ねることによつて、存在のより深い具體的姿を規定し來るのであると云ふより外はないのである。そして存在命題のこのやうな姿こそ、存在命題の動的多性であると考へるべきであらう。しかも存在命題がこのやうにして動的多性を持つと云ふことは、最早や決して機制的意味のものではないことは明らかである。何となれば元來上述の制限を越えると云ふ動的表現は、以上の如き意味の根據としての存在を表現せんとするものであるが故に、それは同時に存在のより深い具體的姿を、換言すればより深い眞理を表現するものであると云ふ要求乃至は主張をも持つてゐるのでなければならないからである。そしてこのことは、同時に存在命題の根本的な論理的制約を構成するものであるが故に、單なる形式論理的な原理に止まることは出來ず、むしろ存在に拘はるところの原理として、動的な矛盾律とでも稱すべきものであらう。このことは重要である。

かくして存在の表現と云ふことは、假令え直觀的であるとは雖え、既に以上の如き論理的反省のもとに存在命題の主語の置位にあるこの存在を、その述語の置位に於ける述語的表現にまで動的に綜合し來ることであり、それは又、嚮きに表現の根據として〝外〟に指示されたに過ぎないところのもの（存在）を、いまやこのやうな直觀的表現を媒介として動的に我々の〝内〟に實現することでなければならないのである。

*

〔存在の積極的表現は存在命題の多性による連續的表現である。〕

さて、存在命題に於て存在は常に制限せられたものとして表現せられると共に、この制限を越えるところに、それが存在の表現であることの本質があつたのである。即ち存在命題は自からの持つ述語的表現を越えると云ふ動的原理であるところの多性を持つて居るのであつた。しかしながら存在命題のこの多性の故に、そこに表現せられるところのものは、常に〝制限を越えるもの〟であり、直觀的なる制限を契機的に内に含むことによつて、制限の外に出るやうな表現である。實際、存在の表現が制限的である根據は、どこまでも直觀の持つ制限にあつたのであり、これを外にしては、論理的には存在の表現が制限的であるべき根據はどこにもないのである。それ故に存在命題の多性は常にこの制限と戰ひ、この制限を越えやうとするところに成立したのであつた。しかも既述の如く表現はどこまでも直觀的表現を超脱することは出來ないとするならば、存在命題の多性によつて表現せられるところのものも亦、再び制限の内なる直觀的表現以外に出ることは出來ない筈である。

それ故に存在命題による存在の積極的表現は、かゝる制限の内にある直觀的表現を越えると云ふことに依つて爲される外はないと共に、このことは再び直觀的表現自身が制限的であると云ふ事實を離れては、考へることも出來ないのである。從つて存在の積極的表現は、先づ制限をその契機として持つて居り、この制限を媒介として、これを越えるところに成立すると云はなければならないのである。存在の積極的表現を、このやうな契機的展開の姿に於て見るとき、それを存在の連續的表現であると云ふことが出來るであらう。

＊

〔空間は存在の制限的表現として、存在命題の消極的な契機である。〕

存在命題の述語的表現は、直觀的である限り制限の内にあることを免れることは出來ない。さて表現が制限の内に止まり、未だ連續的表現を持つに至らない場合、このやうな制限的表現は、連續的表現を成立せしめる爲めの、たゞ契機的な意味しか持つては居ないのである。否、むしろ連續的表現を豫想せずしては、このやうな制限的表現を考へることすらも出來ないであらう。從つて存在命題の述語的表現をこのやうな制限的表現として考へるとき、それはどこまでも存在の連續的表現を成立せしめる契機であると共に、又この連續的表現の制限的契機としても考へられなければならないのである。それ故にこのやうな述語的表現は、それ自身の内には最早如何なる連續的表現をも持たないにも拘らず、それが連續的表現の制限である限りの内容を持つと共に、自からが越えられることに依つて、再び連續的表現を持つことが既に豫想せられて居るところのものなのである。

こゝに、このやうな述語的表現が消極的表現であると云はれる根據があるのである。かくて存在命題による述語的表現は〃存在の表現〃であることを離れることは出來ないにも拘らず、從つて又かゝる述語的表現は、越えられる限り益〻豐富なる述語的表現を重ねて行くものであるに拘らず、しかもそれが以上の如く、結局に於て制限の内に止まるものと見られる限り、それ自身としては、どこまでも靜的消極的表現であると云ふより外はないのであつて、我々はこのやうな表現を存在命題による連續的表現への空間的契機であると云ふことが出來るであらう。

それ故に、我々が一般に空間と稱して居るところのものを、例へばヒューム、カント等の意味に於ての、印象(impression)乃至は現象の現れ方、即ちその形式であると考へることは勿論出來ないと共に、又〃個々の現象がその部分に於て成立する如き全體の表象〃でもないのである。從つて又〃一切の對象がその内に限定せられなければな

らない純粋直觀〃〔Kant: Kritik der reinen Vernunft S. 37 B.〕の如きものではないのである。元來制限の內にある表現は、既述の如くそれ自身、內容的であると共に、又常に越えられる運命のもとにあるところのものであり、從つてその限り偶然的消極的表現に過ぎず、最早や如何なる先天的な形式でもないのである。そしてこの制限的表現は、たゞそれが越えられると云ふことに對してのみ、その〃制限〃と云ふ意味を有して居るに外ならないのであるから、このやうな意味での空間的表現と云ふものは、むしろ內容的に常に豐富になるところのものであると共に、又常に越えられるところの、以上の如き消極的表現に過ぎないのである。

*

〔時間は存在の連續的表現として、存在命題の積極的な契機である。〕

存在命題の一つの契機は、以上に述べた如き述語的表現が制限を持つことであつた。しかも制限とは、それを越えると云ふ動性に對立してこそ、はじめて〃制限〃であるのであるから、そこでこの〃越える〃と云ふ存在命題の動性こそ、存在命題に於ける表現の第二の契機を構成して居ると云はなければならない。そして、この制限を越えると云ふこの動性こそ述語的表現に於て、その制限から來るところの消極性を打破して、存在の連續的表現を可能とするところのものと云はなければならない。然しながら既に述べた如く、我々は存在命題に於ては、制限的なもの以外の如何なる述語的表現をも單に直觀的には持つことは出來ないのであるから、この制限を越えると云ふことによつて成立する連續的表現は、最早や直接的であると云ふより外はないのである。

それ故に制限を越えると云ふ動的契機は、この意味で連續的表現であり、存在の表現の積極的契機であると云ふことが出來る。我々は存在の表現の、このやうな契機を時間と稱することが出來るであらう。そしてこのやうな時間と

しての連續的表現は、既に述べた如く、制限的表現としての空間的契機に對して、はじめて云へることであり、空間的契機を越えると云ふ點に具體的に展開せられるものであるから、この意味で空間の直觀的表現を既に自からの內容として居るものと云はなければならない。換言すれば連續的表現としての時間の積極的契機は、常に自からの內に直觀的表現としての空間的契機を含んで居ることによつてそれ自身具體的なのである。

然しながら存在命題の述語的表現が單に直觀的であり、從つて若し制限の內に止まつてしまふならば、その限り時間の積極的契機も亦、再びこの空間の制限的表現の內に契機的に含まれるに止まることとなるであらう。卽ちそこに於ては時間は既にその積極的表現を失つて、逆に空間の消極的表現の內に契機的に含まれると云ふに過ぎないものとなつて仕舞ふのである。

我々が通常、時間と稱して居るところのものは、このやうにして直觀的表現の內に契機的に表現せられて居るものに過ぎない。それは最早や眞の時間ではなくして、むしろ空間的表現の內に寫しとられたところの、云はば時間の影の如きものに過ぎないのである。

我々は、一般に時間をこのやうなものとして、制限的表現の內に捉えて居るのである。例へば我々が時間を表現しやうとする場合には、それは常に何者かの持續又は繼起の如き表現を以てする外はないのであつて、このことは明らかに時間が以上の如く持續乃至繼起とでも稱し得るやうな仕方で、直觀的表現として空間的に寫しとられて居ることを意味して居るのである。なほこのことに就いては、後に個體的表現に於ける〃運動〃に關聯して更に明確にされるところである。

＊　＊

二　個體的表現に就て

＊

〔個體的表現の成立とその超克〕

さて、我々は存在以外の如何なるものも、積極的なるものとして表現することは出來ない。逆に云ふならば積極的表現と稱し得るものは、すべて存在の表現でなければならないのである。このことは、既に存在命題に於ける根本的な矛盾律によつて明らかである。然しながら、かくの如き存在の積極的表現が、ひとたびその連續的表現を失つて、上述の如く制限的、從つて空間的表現の内に止まるや否や、存在のかの積極的表現は、制限的表現の内に、それ自身〝内容的なるもの〟として閉じ込められてしまふことになるのである。詳しく云ふならば〝内容的なるもの〟とは云つても、それが積極的表現である限りはどこまでも存在の表現であり、その限り連續的表現でなければならないのであるが、それが上述の如く制限の内に閉じ込められる限りに於て、この連續的積極的表現は、そのまゝ〝内容的なるもの〟にまで貶下せられて、こゝに單に消極的表現を持つに過ぎないものとなるのである。更に言葉を換えて云ふならば、それは絶えず制限の内にある直觀的表現を重ねることに依つて、その限り豐富なる連續的なる表現を持つものであるにも拘らず、いつたんその積極的表現を見失ふや、その限りそのまゝ直ちに制限的表現の内に墮して仕舞つたものと云ふべきであらう。

存在命題がその多性を失ふ限り、その述語的表現は以上の如き制限的表現に陷るのである。そしてその限りに於ては。それは既に述べた如き空間的表現であると云ふことも出來るであらう。然しながら、いまやそこに於ては存在命

題の動的表現は既に失はれて居るのであるから、かの空間的表現がなほ有して居た如き積極的表現への契機的意味すらも、いまは既に見失つて居ると云はなければならないのである。このことは注意すべきことである。從つてこのやうな制限的表現は、そのまゝでは〃表現〃であることすら出來ない筈である。何となれば、そこには既に存在命題の多性が〃見失はれて居る〃と云ふ制限が加はつて居るからである。そしてこの制限は、制限として本質的には同じであるかも知れないが、然し存在命題に於ける直觀的表現の持つ制限であると云ふよりも、こゝでは寧ろ存在命題自身の動的多性に對する制限となつて居ると云ふべきであらう。端的に云へば、いまや存在命題それ自身が制限の内に陷つて居るのである。そのため存在命題は、その多性を失つて仕舞ひ、その述語的表現はたゞ靜的な直觀的表現にまで固着してしまふのである。そこに於ては存在命題は、既にその述語的表現を越えることを知らないものとなつて居るが故に、越えることをせず、却つてたゞこの固着的、靜的な述語的置位の直觀的表現のみを敢えて〃表現〃として受け取らうとするのである。從つてこゝに當然生じ來るところの注意すべきことは、かゝる固着的な述語的表現の根據となるべきものが、その主語的置位に再び新らたに反省せられて來ると云ふことである。

このやうにして存在命題は、自からの持つ動的な論理的構造を抽象して仕舞ふことに依つて、存在把捉の原理であることを自から放棄する結果となるのである。即ちこれを詳しく云ふならば、そこに於ては制限的表現には、最早や多性による展開を期待することが出來なくなつて居るのであるから、それ自身單獨の靜的固定的な述語的契機として考へるより外はないところのものとなつて仕舞つて居ると共に、この述語的契機に對する主語の置位に、以上の如き制限的表現の根據となるべきものが同じく靜的固定的なるものとして考へられて來るのである從つてその論理的構造は、既に存在命題とは全然異つて、單に主語と述語に關する靜的單一的な命題構造に於て考へられるところのものに

過ぎない。しかもこのやうな命題の述語的表現の根據として、その主語の置位に考へられるところのものに對しても亦、〃これ〃と云ふ指示代名詞が用ひられるのである。それは〃存在〃の場合とは異つて、既述の如く固定的ではあるけれども然し注意すべきことは、この場合と雖ども尙ほ〃これ〃と云ふ主語的規定は、決して單なる〃形式〃に止まるものではないと云ふことである。さうではなくして却つて、明らかに述語的契機のもとにある直觀的表現の主語的規定であつて、まさにその故にこそ、この直觀的表現自身も亦、個體的な表現をとり得て居るのであると云はなければならないであらう。例へば〃これは花である〃と云ふ抽象論理的構造を持つ命題に於ても、その述語的に表現せられるところのものは、〃これ〃と云ふ代名詞によつて指示せられて居るものを根據とするところの述語的表現であつて、〃この花〃である。

それは所謂る概念ではなくして、勿論それ自身直觀的な表現でなければならない。しかしそれは既に、何等越えられると云ふものではなくなつて居るのであるから〃この花〃と云ふ直觀的表現は、それ自身靜的固定的なるものとしての個體的な表現を持つて居ると云ふべきであらう。然しこの場合〃この花〃と云ふ直觀的表現は、たゞ抽象論理的な主語的契機としての〃これ〃を、その根據として居るに過ぎないものであるが故に、假令それが〃表現〃であることを借稱し得たとしても、最早や本來的な意味に於ける存在の動的表現であることは出來ず、たゞ單に〃これ〃としてその場に固定せられ、固執せられた直觀的表現とでも云ふべきものに外ならないであらう。從つてそこには何等個體の表現としての確呼たる根據を見出すことは出來ないが故に、既述の如く個體の表現でないことは明らかであるが、然しこのやうなものとして〃何か個體的なるもの〃の表現であるかの如き觀を呈して居ると云ふことは出來るであらう。それ故に我々は今、それをこの意味で假りに〃個體的表現〃と稱することにしやうと思ふのである。

然しながらこのことは、どこまでも存在命題の動的多性の抽象の故に、その制限的空間的表現自身の陷つた錯誤とでも云ふべきものである。このやうな錯誤が一體どこから生じ來たるのであるか？　それは、かの〃制限〃の由つて來る根據と共に、動的な存在命題の積極的契機の側からは說明出來ることではないのである。しかし兎も角も、存在命題の動性が見失はれることによつて生ずる〃個體的表現〃と云ふものは、かの根本的な矛盾律によつて、明らかに錯誤的な表現であると云ふことが出來るのである。それ故にこのやうな錯誤的な表現に過ぎないところの個體的表現は、存在命題がその動的表現を回復することによつて、必然的にその個體性に關して根柢から崩壞し去るところのものでなければならないのである。何となれば、かくの如き個體的表現と云えども、既に明らかなる如く存在命題の述語的表現を更に抽象論理的乃至は文法的に限定したゞけのものに過ぎず、從つてその本質はどこまでも存在命題にとつて、依然として制限的述語的性格のものでなければならないからである。

かくて存在命題の述語的表現が制限の內に止まつて、その動的多性を見失ふ限り、存在命題は抽象化せられて、たゞ以上の如き〃個體的表現〃を持つことになるのである。從つて、そこには既に連續的表現はなくして、たゞ〃斷絕〃があるのみである。斷絕はどこまでも斷絕であつて個體的表現自身の側からは、それを越える道は既に閉ざされて居るのである。それ故に個體的表現が遂に個體的表現に止まるならば、それは分散し孤立化し、遂には消散して何等表現ですらなくなつてしまふであらう。然しながら既に明らかなる如く、個體的表現のかくの如き斷絕は、もともと動的積極的表現としての連續的表現の斷絕であつた。この意味では、既に連續を豫想しての斷絕でなければならないのである。それ故に既に述べた如く、個體的表現は自から斷絕をたゞ越えることに依つて、その積極性を取り戻し

て連續的表現を持たなければならないし、又持つことが出來る根據があると云はなければならないであらう。然しこのことは、斷絶的な個體表現の側にとつては、依然として如何とも爲し難き消極的表現に止まるものに過ぎないのである。

こゝに至つて、我々はたゞ存在命題の自覺のみが存在命題の動的多性を回復せしめて、この個體的表現の斷絶を越え連續を齎らすことが出來るのであると云ふより外はない。從つて個體的表現を越えると云つても、それは最早や以前の如く、單に制限的表現を越えると云ふだけの意味に終るものではなくして、實はこの個體的表現の斷絶を越えると云ふ意味のものであり、この點に於て存在命題の動的多性を回復すると云ふことでなければならないのである。しかもいまや個體的表現が越えられることによつて、そこに實現し來る積極的表現に於ては、この直觀的なる個體的表現は、そのまゝこの積極的表現の契機となつて居るのでなければならないのである。

然しながら既に述べた理由からして、個體的表現が越えられることに依つて持つ積極的表現は、我々の知らない根據からして、再び斷絶に陷つて更に個體的表現を持つに至るのである。そこに於ては、かの直觀的なる個體的表現を自からの契機とする積極的表現は、そのまゝ再び個體的表現の制限の内に陷ると云ふべきであらう。このことは例へば〃前の〃と稱し得る個體的表現は、越えられると共に、再び〃後の〃と稱し得るやうな個體的表現の中に〃含まれる〃と云ふふうに說明することが出來るであらう。

そしてこのことに依つて、そこにはいまや前の個體的表現は、直觀的な契機として含まれると云ふかたちで後の個體的表現の内に、直觀的な秩序とでも云ふべきものを構成して居ると云ふことが既に想定し得られるであらう。

例へば、〃この花〃はその限り直觀的であると共に、個體的表現である。然しそれが〃花瓶に生けられ、我家のこ

の床の間に置かれた花〃と云ふ個體的表現にまで展開せられたとき、前の個體的表現としての〃この花〃は後の個體的表現の中に直觀的に含まれると云ふ表現を後の個體的表現の内に持つのである。否、實はこのやうな直觀的な個體的表現に基いてこそ、はじめて、逆に〃前〃〃後〃〃含まれる〃等の如き秩序的なものの一般的表現さえも可能になつて居ると云ふべきであらう。

我々はこのやうなかたちで、常に最後の個體的表現の内に、以前のあらゆる個體的表現を、契機的に區別することが出來るのである。之を逆に云ふならば、個體的表現の〃多〃は、まさにこのやうな空間的秩序を構成することによつて、最後の個體的表現を形成する〃契機〃として、云はゞそれ自身直觀的秩序のもとに、はじめて表現せられるところのものと云はなければならない。しかもこの最後の個體的表現も亦、越えられるところの消極的表現に過ぎないのであるから、この最後の個體的表現を越えると云ふことには、換言すればこの點に於て存在命題の動的多性を回復すると云ふことには、この意味から云つて、實はすべての契機としての個體的表現の〃多〃の積極的表現が賭けられてあると云つても過言ではないであらう。それは勿論連續的表現には相違ないけれども、このやうにして最後の個體的表現を越えると云ふこと。即ち斷絶から連續を〃回復〃すると云ふこと。それをこそ、むしろ既述の時間として、否、〃今〃として表現すべきであらう。

かくて存在命題は個體的表現の内に自己の消極的表現を持つと共に、それを契機として再びこゝに自己を回復することによつて、はじめて眞に具體的に積極的表現を持つに至るのである。

しかもこの最後の個體的表現を越えることによつて、積極的に表現せられるところの〃今〃は、如何なる意味に於ても形式的なるものではなくして、實質的具體的〃今〃である。從つてこのような眞の時間的表現には〃多〃を

考へることが出來ないから、この〃今〃から區別し得るやうな他の積極的な時間的表現と云ふものを我々は持つことが出來ないのである。從つてこのやうな〃今〃に於て實現する積極的表現に於ては、かの最後の個體的表現は既に越えられることによつて解消し去ると共に、それは却つて個體的〃存在〃そのものの表現の爲めの豐富なる契機的役割を演ずるに至るのである。それは積極的表現の〃契機〃として、積極的に、具體的に秩序付けられることによつて、時間的に〃今〃、却つて〃存在〃そのものを表現するところのものとなつて居ると云はなければならないであらう。

*

〔運動とその方向。〕

これが個體的表現としての制限を越えると云ふ〃動的表現〃に外ならない。それ故に〃動的〃であると云ふことは、單に連續的乃至は時間的表現であると云ふに止まるものではなくして、最後の個體的表現を越えると云ふことであり、それ自身に於て斷絶的孤立的な個體的表現に對して、その積極的表現を回復し來ると云ふことでなければならない。そこに於ては、かの直觀的な秩序的契機のもとに展開せられた個體的表現は、今や積極的表現の契機となることによつて、個體的〃存在〃の表現を持つことになるのである。これが眞の意味での〃運動〃と云ふことである。それ故に運動は具體的であり、〃存在〃を個體として表現することでなければならないのである。從つて運動と云ふことは、常識的な意味で解釋することは出來ない。我々は實際に於て空間的運動としての個體的なるものの運動を持つて居ると考へるかも知れないが、實は個體的表現と云ふものは、既に述べた如くたゞ越えられ解消せられると云ふ

消極的な意味で限定的であると云ふに過ぎないものであるから、個體的表現自身の內には如何なる動的時間的表現も持ち得ないのである。從つて又運動について、如何なる積極的な原理も、その限り個體的表現の內には見出すことは出來ないのである。

然しながら個體的表現のみに關して云ふならば、個體的表現を越えると云ふ動的表現も亦、實は再び個體的表現の內に寫し撮ることに依つて、所謂る空間的な運動と云ふものを把捉することは出來るのである。卽ち一般的には〃前の〃と稱し得る個體的表現を、同じく〃後の〃と稱し得るやうな個體的表現の內に契機的に固定することによつて生ずるこの綜合的な個體的表現に於て、謂はゞ〃空間的ずれ〃の直觀を持つことになるであらう。

然しこゝに注意すべきことは、このやうにして個體的表現の內に、云はゞ空間的に捉えられた運動と云ふものは、どこまでも運動そのものゝ積極的な表現ではないと云ふことである。それはどこまでも消極的であつて、かの直觀的秩序に屬するものに過ぎないのである。そして〃次々〃とか〃前の〃〃後の〃と云ふやうな一般的表現の如きは、更にこの〃空間的ずれ〃としての直觀的秩序に基いてこそ、はじめて可能であることは既述の通りである。

それ故に、このやうな所謂る空間的な運動と稱し得るものは、積極的な眞の運動が、〃絕えず〃夫々固定的な個體的表現にまで〃映寫せられることに依つて〃直觀化せられたものの總和であると云ふ外はないのである。然しながら存在命題の積極的表現に於ける多性は既に數的多數ではないのであるから、このやうな眞の運動の影としての個體的表現にも數的な總和を考へることは出來ない。從つてそのやうな運動はむしろ以上の如き個體的表現を契機として居るところの直觀的秩序の積分（Integral）とでも云ふべき總體（それ自身既に再び個體的表現ではあるが）であると考へるべきではないであらうか？　然し運動が假令えこのやうなものとして捉えられたとしても、それはどこまでも

消極的表現に過ぎない。端的に云へば、運動そのものではなくして、依然として運動の影に過ぎないのである。從つて、そこに於ては本來運動自身が持つべき〃方向〃の如きものを終局的に理解し得る原理を、それ自身（個體的表現）の内には持つては居ないのである。

然しながら是に反して眞の運動とは、個體的存在を〃積極的に表現する〃と云ふまさにこのことであり、從つてそこには限定的に對立し來る消極的個體的表現を、〃今〃の積極的表現へと越えると云ふ〃方向〃を既に持つて居るのである。即ちその方向は、限定的消極的表現であるところの個體的表現を〃越える〃と云ふ方向であるから、この方向に就いては、個體的表現それ自身の内には、最早や如何なる表現も見出し得られないものであることは、むしろ當然であらう。しかも存在命題の述語的表現は、常に運動のこの方向に關して、個體的表現を契機的に秩序付けることによつて、その多性を展開して居る。それは常に斷絶を越えると云ふことによつて爲されるのであつて、このことは再び直觀的秩序の契機的な蓄積をもたらすこととなつて、個體的表現の内容を益〻豐富にするに至るのである。而もこの〃方向〃が既述の如く〃今〃の積極的表現と云ふことにあるとするならば、この契機的に蓄積せられた個體的表現の豐富なる内容は、すべて〃今〃の積極的表現の契機として役立つところのものでなければならないであらう。この意味に於て、かの最後の個體的表現の内に映寫せられた運動、換言すれば直觀的秩序の豐富なる契機的蓄積の總體(Integral)こそ、實はそれを越えることに依つて實現する〃今〃の積極的表現に對してはじめて〃過去〃と稱せられるところのものなのである。然しながらそれは過去であると云つても、既に〃今〃の積極的表現に於て契機的にのみ捉え得るところのものに過ぎないが故に、その豐富なる内容にも拘らず我々は過去そのものの積極的表現を持つことは出來ず、却つてただこのやうに、消極的に表現し得るに過ぎないものなのである。

然しながら又それと反對に、この最後の個體的表現自身の側に對しても亦、それが制限的消極的表現である限り、それを越えると云ふ運動の方向が必然的として示されて居るのである。

然しそれは、かゝる消極的表現を越えると云ふ方向であるが故に、その方向に就いては、それを表現すべき如何なる契機をも、消極的個體的表現の側からは見出すことは出來ない。即ち消極的個體的表現は、まさにこの消極性の故に、自からの内にその制限の解放の必然性を運命的に藏して居ると云ふことは出來るけれども、この消極的個體的表現の側には、それを積極的表現に轉ずるべき如何なる契機をも有しては居ないのである。個體的表現からの、かくの如き〃方向〃こそ〃未來〃と稱すべきものとして、消極的にではあるけれども、矢張り〃今〃に對してのみ區別し得られるところのものと云ふべきであらう。

それ故に、未來とは個體的表現の側から必然的に表現せられる〃運動の方向〃でなければならないけれども、然しそれを表現すべき如何なる積極的契機をも自からの内には持たないが故に、無内容であり、たゞ方向のみが必然的にとは雖えたゞ消極的に示されて居る如きものと云はなければならない。かくて〃未來〃とは、どこまでも個體的表現に於けるその積極化の方向であるが、實際越えることによつて表現せられるものは、時間的〃今〃の表現であるから、未來と云つてもそれは決して〃今〃に續くと云ふ如きものではない。むしろどこまでも所謂る最後の個體的表現からの、從つて過去からの、現在への方向付けであり、それは越えられて、直接に〃今〃の積極的表現を持つに及んで、その中に果敢なくも解消し去るものであると云はなければならないであらう。（終り）